

アーティスト・イン・レジデンス 滞在制作における表現の可能性 / 『高砂生活』

大阪芸術大学 芸術計画学科 教授 山村 幸則

ある土地に一定期間滞在し作品制作をすること、「アーティスト・イン・レジデンス」を通して、更なる芸術表現の可能性探求を目的とする。

私は 1990 年代後半から世界各国でのアーティスト・イン・レジデンスに参加し、現代アート領域にて、素材や表現方法を多岐に拡張しながら表現活動を継続してきた。不確定要素の多い滞在制作はアーティストが臨機応変に場や人に委ねる姿勢を持ち、即興性を受け入れながら展開してゆく。その制作過程に醍醐味を感じる。それは芸術計画において豊かな挑戦であり、大きな意義を感じる。

新型コロナウイルスの蔓延により 2019 年 2020 年はアーティストも世界と分断された。渡航困難な時期、私は国内で滞在制作を始めた。2021 年 8 月、2022 年 3 月、2023 年 8 月と 3 度にわたり兵庫県高砂市『町家 Tentofu 内アートスペース Imagine』にてアーティスト・イン・レジデンスを行なった。

兵庫県高砂市はかつて旧街道や鉄道を介した陸運、加古川やその支流、播磨灘を介した水運など、交通の要衝として、その交易を介して発展してきた。山陽電鉄高砂駅以南の街並みは近年、居住人口の減少による空き家、空き地、空き店舗の増加により、商業集積地の商店街が衰退する状況が起きている。

歴史的には相生の松によせて夫婦愛、長寿の理想をあらわした能、謡曲の代表作「高砂」の舞台でもある。また高砂人形の「尉」と「姥」は結納品として全国的にも知られてきた。

2021 年 8 月、滞在先の兵庫県高砂市、町家 Tentofu は高砂神社の海側に位置する。滞在期間の多くの時間をフィールドワークとして重ねるうちに、1 軒の古民家から私の元へ高砂人形が巡って来た。埃を被った一刀彫の高砂人形はその役目を終えても高砂に暮らした夫婦の歴史を見届け今日に繋がる確かな素材であることを再認識した。そこで私は滞在中に全国から高砂人形を収集、研究を進めた。木(一刀彫、彩色)、陶(信楽、九谷、青磁)金属(鉄、銅)木目込など、人形の素材、尉と姥の持つ、熊手と箒の種類も多種多様であった。近年の高砂はプライダルタウン、縁結びを町のイメージとして押し出している。

次にサイトスペシフィックな表現を追求してゆくと、フィールドワークの中で収集を始めた。尉と姥の様に「対」に見えるものを集めて持ち帰り、空間を構成してゆく。

漁師町では地元の漁師さんから協力を頂き、錘や仕掛け、蛸壺など、漁具が入手出来た。その土地を象徴する素材を空間に配置してゆく。

なかでも印象的だった滞在制作の一場面は、ある雨の日の散歩中、解体中の家屋を見つけ、建具、木戸を入手したことである。空間を緩やかに繋ぎ、隔たり、長年にわたり高砂の一家の生活の一部だった一對の木戸は凜とした佇まいで空間を引き締めた。

収集した高砂人形 12 組の邂逅、空間の中央に配置した。既製品、骨董品、収集品が共鳴し合うインスタレーショ

ンは実り多い試行となった。

2022 年 3 月の滞在では石の宝殿、生石神社の裏山、恵まれた地域資源の上に立ち、高砂市内を臨んだ。地元 の骨董店から桐箱の蓋をご提供頂き、「高砂生活」の文字を反転、木目を活かしながら木彫し、版画を刷った。それらは「高砂生活」にて出会う方々に手渡す為。版画を持って漁師さんを訪ねると、高砂の船着場にて時を重ねた熊手と箒を頂いた。

竹製のそれらは長年、播磨灘の潮風、雨、太陽に晒され、燻銀の無骨な風格が漂うまでになった。日々の営み、時間の蓄積により、単なる生活用品が特別な次元の素材になり得ることを目の当たりにした。

白砂青松、高砂の原風景を探し、熊手と箒を用いたパフォーマンスを実施、撮影する為、ワークショップを開催した。加古川河口、向島公園の松林を抜け、海辺で参加者 11 名と熊手と箒を交互に空中に投げ上げる様子を動画で撮影した。熊手と箒は手を離れ、宙に浮き、最高地点に達し静止する瞬間がある。1 コマから静止画を抽出し、春の海辺にて不思議なひと時を作品化した。

2023 年 8 月、高砂にて 3 度目となるアーティスト・イン・レジデンスを行なった。2021 年から継続していることの 1 つに日々のフィールドワーク、散歩がある。夏、8 月には沸き立つ夏雲の写真撮影を行ない記録してきた。高砂大橋、加古川沿いから積乱雲の撮影の間にも雲はとてつもないエネルギーを内包するように形を変えてゆく。カメラのファインダーには加古川沿いに三菱製紙工業株式会社高砂工場の 2 本の煙突が目を引く。

2021 年 8 月の最初の私の滞在時にご縁を頂き工場を訪れ、お話を伺った。「工場は当初現在の神戸市三宮にあったか、明治 34 年 7 月、用水の欠乏を感じ、加古川下流の現位置に移転、高砂市における工場進出の先駆として、創設当初はその土地は水量の豊富な加古川に接しており、工場用水については絶対に安心である。播磨灘を近くにひかえているので排水上、極めて便利であると言われ…選定された」ということであった。紙と水と高砂の地との関係性を知り、大きな感動を覚えた。

今回の滞在時には三菱製紙工業株式会社高砂工場から幅 90cm×100m に及ぶロール紙をご提供頂いた。紙と水と高砂の地の関係性を知り、それは私の中で自然と沸き立つ夏雲に繋がった。ご提供頂いた 100m のロール紙を空間の中でゆっくり解きながら、紙に身体を委ねる様に成形してゆく。沸き立つ夏雲のイメージを抱きながら、現れた形を天井から吊り下げた。

想定外のことを取り入れる非日常の日常、滞在制作の日々を「高砂生活」と題した。そこには常に人との出会い、真実の物語があり同時にそれはとても個人的な極めて儂いものである。アートは誰かのための特別なもので無く、私たちの生活と地続きのもの。計画に収まり切らない、想定外も含め表現に繋げてゆきたい。